

# 私たちの町の遺跡 大名墓物語 細川家の人々

## ■第2話 墓を立派に造る、という流行

江戸時代の大名の墓は立派です。特に江戸時代初め頃には、墓石が大きいというだけではなく、立派な建物（霊屋(たまや)）を造ることも多くあります。建物全体が墓なのです。北岡自然公園にある妙(みょう)解(げ)寺(じ)跡の細川忠利の墓はその代表例ですし、明治時代に建て直したものではありませんが、本妙寺にある加藤清正の墓（浄(じょう)池(ち)廟(びょう)）も目を見張るような豪華な建物です。この墓を立派にする、という行為は豊臣秀吉の墓（京都の豊国(とよくに)廟(びょう)）から始まり、江戸時代になって流行しました。それ以前の戦国時代は、墓を造ることにエネルギーを使わなかったようで、戦国大名・武将の墓は、規模が小さく、それが死んだ時に造られたものかどうかとも疑わしいものが殆どです。全国にたくさんある織田信長の「墓」もそうで、いずれも驚くほど小さなものです。熊本市内の例をみると、旧植木町一帯を治めていた戦国武将、内古閑(うちこが)鎮資(しげすけ)の墓は、市内では唯一、死んだ時に造られたとみられるものですが、やはり小さなものです。

平和で安定した身分社会を保つため、墓によって為政者（大名）の権威を示す、それが江戸時代には必要なことだったのです。

熊本市文化振興課 美濃口雅朗氏

戦国時代は、大きな墓より守りの堅い城造りに一生懸命だったのかな？

